実相寺庭園に関する調査報告

Investigation of Jissoji Garden

関西剛康*・山田巨樹*

Takayasu SEKINISHI・Naoki YAMADA

*株式会社 中根庭園研究所

Nakane Garden Research & Landscape Consultant Co.

Key Words : 1. 実相寺庭園 2. 枯山水 3. 禅宗
1. Jissoji garden 2. Dry landscape 3. Zen buddhism

摘 要

実相寺庭園の調査は、平成6年(1994)に秀逸な枯山水が発見されたことに始まる。この論文では、実相寺に関する史料を参照しながら、平成11年(1999)5月に行った庭園の実測調査をもとに、庭園の地割、意匠及び作庭年代などについて考察した。実相寺自身の由緒は金指の近藤家の加護を受けたことなどが判明しているが、本庭園に関する史料・文献はなく、近傍に所在する龍潭寺庭園や摩訶耶寺庭園と同様に、作庭年代・作者に関する確証は得られなかった。しかし、本庭園はこれら近傍の庭園と比較検討すると、その地割や手法に類似した点が多く、何らかの関連性があると考えられるものであった。

はじめに

実相寺は、浜名湖の北東方向、静岡県^{いなさ}引佐郡引佐町金指に位置(図1~3)し、宗派は臨済宗方広寺派に属する。この実相寺の位置する静岡県引佐郡には有名な古庭園が点在する。同引佐町には龍潭寺・方広寺が、近隣の細江町には長樂寺、三ヶ日町には大福寺・摩訶耶寺の庭園などがある。

この実相寺での古庭園の発見は、平成6年(1994)に強剪定管理¹⁾を施したところ、その低木類の下から岩組などが確認されることとなり、そこに秀逸な枯山

水が出現したことに始まる。

庭園の剪定管理を施す以前は、長らく本格的な手入れにも欠け、言わば放置状態とも言えるものであり、枯池部分は砂利もなく赤土の表土が露出しており、築山は低木類で覆われ、樹木も伸び放題であった。現在では芝生・砂利を施し、樹木を剪定・伐採して現状の庭園としたとのことである。そのため、本庭園については作庭にかかわる史料がなく、寺伝として伝えられているものもない。ましてや現在まで論考もなく、古庭園として確認されることはなかった。

本文では平成11年5月に行った実相寺庭園の実測調査をもとに、実相寺に関する史料を紐解きながら、本庭園に関して報告する。

1. 実相寺の創建とその背景

(1) 実相寺の由緒

実相寺の創建については、江戸時代初期、金指領主、近藤貞用の外護が大きく影響する。この近藤貞用の金指近藤家とは、そもそも永禄11年(1568)12月12日に「井伊谷^{いいのや}三人衆」として曾祖父の近藤康用と菅沼忠久・鈴木重時らが、徳川家康から起請文と所領宛行状を与えられたことに始まる。この所領宛行状は「井伊谷跡職新地本地一円出置事」として、三人衆が家康を^{きょうどう}嚮導したことに對する家康からの恩賞であった。その

図1 浜名湖周辺の庭園の位置図

図2 実相寺及びその周辺の地形図（引佐町都市計画基本図より）

凡例

① 築山 (三連山)	⑤ 礼拝石
② 枯滝石組	⑥ 羽石 (鶴石組)
③ 鯉魚石	⑦ 蓬萊石組 (亀石組)
④ 仁王石	⑧ 枯池

図3 実相寺庭園の諸堂周辺の配置図

後、家康は刑部（現細江町）、白須賀・宇津山（現湖西市）などの諸城を攻略し、^{けが}気賀（現細江町）に位置した堀川城を攻め、永禄12年（1569）3月に落城させている。こうして井伊谷を中心とするこの地域は、駿府の今川氏から徳川氏の支配下に移行する。この地の在地領主井伊氏は今川旗下にあったが、徳川氏の接近を理由に当主直親が殺され、存亡の危機に遭遇していた。しかしこの後、井伊直政は家康の家臣となって各地で戦功をあげることで、家康から井伊谷本領を回復することを認められ、井伊谷三人衆を家臣としていた。天正18年（1590）に直政は家康の関東入国に従って、上野箕輪城主となり、そして関ヶ原の戦いの後は近江佐和山城主となっている。その息子直孝が城を彦根に移し、彦根藩井伊家の祖となる。

井伊家に仕えていた井伊谷三人衆の一人である近藤康用の息子秀用（秀用の嫡孫が貞用となる）は、直政と同様に関東に入国し、慶長19年（1614）には15000石余の大名となる。元和5年（1619）駿府城主である徳川頼宣の紀州転封の際に、秀用は旧領地井伊谷に領地替えを希望し戻ることとなる。元和6年（1620）に、秀用は自らの15000石余を、嫡孫貞用をわざわざ紀州藩より呼び戻し、3140石余の領地を分割相続させて金指に陣屋を置かせて金指近藤家を創出させている。元和7年（1621）には加増馬飼料相州2000石余も相続にあて、井伊谷近藤家・花平（石岡）近藤家・気賀近藤家・大谷近藤家を創出させることとなる。この結果、井伊谷を中心とした所領は近藤家一族の5人に相次いで分地されることとなり、旗本五近藤家が成立することとなる。近藤貞用はこの五近藤家の一つ、金指近藤家の流れである。

実相寺の創立について『松源山実相寺御由緒』によると、金指近藤家の屋敷北側の稲荷山南麓（現引佐高校の裏）には実相寺の前身である新正院があったと記されている。そもそも新正院は、嘉暦元年（1326）に方広寺開山無文元選の法嗣悦翁禪師が開創した寺院であった。

この新正院を寛永5年（1628）に、貞用が現在地に移設したのが実相寺の始まりとされている。新正院の移設は、近藤貞用の父の墓が金指の東にあたる都田村の竜洞院にあり、そこは度々水害を受けることが一つ

の理由と、もう一つがこの地が近藤氏の領地でなかったために将来を憂いでいたことによる。貞用は、父である近藤季用の17回忌の際に、新正院と御廟所を現在の地に移転した。移転した御廟所は高さ9尺、周囲15～6間余の土盛りをした上に新たに造成した五輪塔を建立したものであった。この移転時に新正院の名称は、季用の法名「実相成参居士」をとって、「実相寺」と改称したとされている。

そして万治3年（1660）には、貞用の母である寒松院の墓が同台に建てられており、寒松院の法号に因んで山号も松源山と改め、ここに「松源山実相寺」という山号・寺号が成立した。また実相寺の本寺は臨済宗方広寺であるため、貞用は京都大徳寺の住持琢源に山号・寺号の揮毫をしてもらっている。これにより実相寺は、金指近藤家の祖廟のある寺院となった経緯が知られる。

貞用は自領の経営にも極めて熱心で、山林地が8割以上を占める領内で巧みに山林経営を推進し、金指市場を育成している。

また一方、江戸屋敷において機縁を得た黄檗宗の明僧、隠元隆琦などとの出会いを深め、渡来僧の清新な宗風に関心を高めていった。

そして当時、貞用は隠元と共に来日していた弟子の独湛性瑩を金指に招聘している。『中井家諸色覚書（中井家日記）』の寛文4年（1664）の条には、6月に独湛が金指に到着し、すぐに実相寺内に貞用が建立した新敷寺に入寺したと記されている。貞用は、すぐに独湛に寺院を建立する適切な場所を探させ、初山の地を寺院建立の場所として、同年11月6日から18日頃までに建立のあらかたの地形取りを終えている。寛文5年（1665）正月4日には打立てが、同年6月15日には施設の主要部が完成し、実相寺内の新敷寺から初山に移ったとされている。ここに黄檗宗の宝林寺が初山の丘に出現したのである。

貞用は、独湛が宝林寺に移ってから、実相寺がまだ小院で寺格が確実でなかったこともあり、寛文10年（1670）に独湛の侍者で後の初山4世住持となる石窓を寺格の定まるまで住職として入寺してもらうことを承諾させた。この石窓の時期に寺院の例式が定められるようになると、しばらくして石窓は初山に移ること

となる。この頃の実相寺は黄檗宗の影響下にあったと考えられてもいる。

次に石窓に変わって石牛が住職となる。この石牛も若い頃に隠元に随侍し、黄檗宗との縁が深かった。この石牛の時代に、貞用が実相寺に参拝したことを契機に寺領を定めようとしたが、貞用が亡くなり、その貞用に続き息子の徳用もこの世を去ったため、やっと昔用の時になって近藤家より寺領八石六斗一升と定まった黒印状を受けている。

このように独湛が実相寺に入寺した寛文4年(1664)頃には、寺院としては極めて小院であったと考えられている。そして独湛に随従してきた次の石窓の住職中に例式の基礎が確定し、その次の住職である石牛が更に発展させ、寺領を確定するなど、寺院の経済的な安定に貢献していったものと思われる。

(2) 実相寺の諸堂伽藍

それでは、実相寺の諸堂伽藍が建立していくのはいつ頃のことであろうか。実相寺の諸堂伽藍の建立は、延宝2年(1674)に当初あった本堂が焼失してしまったと伝えられている。その4年後の延宝6年(1678)に再建したものが現在の本堂とされている。本庭園を東側に設ける現在の本堂は、桁行7間、梁間5間半強、寄棟造棧瓦葺であり、向かって右に1間、左に4分の3間の差掛屋根を設け、背後に拡張している。正面三方には化粧屋根裏天井の広縁が廻り、前面広縁幅1間強、奥行室幅上下2間半、仏間、上下奥の間、見付は室幅、仏間が3間、上下間が2間となっており、室境の柱筋に繫梁が入っている。この室幅では内法を高くして差鴨居を入れ、上段に花紋入の欄間がある。室幅と上下間の境の内法長押上には中央を鉄具で吊っている竹節櫓掛があり、三室の天井を一つにしている。また仏間では、側柱通りに円柱棕付き来迎柱を立て、頭貫、台輪(隅留)を載せ、禅宗様出組斗を組んで、前に禅宗須彌壇を設置している。元拱から背後に下屋が立てられていたと考えられ、仏壇の裏側が通れたとも推測されている。天井は格天井、仏壇は新しく、両脇間境も背後の1間は壁になっていたため、元来は一直線の簡素な仏壇であったとも考えられている。本尊は釈迦三尊(釈迦如来・文殊菩薩・普賢菩薩)である。

次に元禄15年(1702)には本堂の南東側にある観音

堂が再建されている。本建築は宝形の屋根をもち、内部の床は現在では畳敷であるが、元来は中国様の^{せん}磚敷であった。本尊の聖観世音菩薩は天正17年(1589)の造像であり、他に西国三十三ヶ所観音像・弘法大師・妙見尊天を祀っている。

他の諸堂としては、享保2年(1717)建立の鐘楼門、弘化2年(1845)再建の^{こうしんどう}庚申堂がある。

また近代に入ってからの変遷は、昭和24年(1949)に本堂の一部と観音堂を園舎として、私立金指幼稚園が創設されており、この年に観音堂東側背後を造築している。昭和29年(1954)には、経営も私立から引佐町立保育園となって、北側(築山の背後)に新園舎が建設されている。しかし当初、この敷地には近藤季用夫妻の墓があった。その状況が明治25~26年頃に作製された銅版画(図4)に描かれている。しかし、この新園舎を創設するために墓地は造成で潰され、その後を幼児のトンネル遊び場となるよう土管が埋められていた。この二つの墓石は本堂北側墓地内に骨壺とともに移設され、現在に至っている。その後この保育園も合併されて廃園となり、昭和54年(1979)に利用していた塚土壘も取り除かれ平地になっている。

本堂に付属する庫裡は昭和11年(1936)に改築、昭和61年(1986)に修復されている。

庭園外周の生垣は、昭和37年(1962)の施工であり、以前は草の建仁寺垣であった。

また、本堂と観音堂を繋ぐ鉄筋コンクリート製の渡り廊下は、昭和61年(1986)の建設である。

2. 実相寺庭園の形態と手法

発見された庭園は本堂に対して東庭、そして観音堂の北庭となり、基本的な形態として、枯滝組・枯池などの伝統的な意匠を施した築山式枯山水(図5及び写真1・2)と考えられる。

(1) 地割と意匠

庭園意匠は、庭園の北側面に築山の三連山が設けられ、また築山頂上付近から築山裾にかけて石組が施されている(写真3)。その築山法面中央に、豪快で数段の枯滝石組がある。この枯滝石組に向かって右側の滝添石には、それに寄り添うような斜めの景石が据えられている。これを鯉魚石(写真4)と考えると、京

図4 明治25～26年頃に描かれた実相寺全景の銅版画
庭園部分は樹木で隠れて描かれていない（『静岡県明治銅版画面風景集』より）

実相寺庭園実測図

平成11年5月実測

図5 実相寺庭園測量図面 (平成11年5月22~24日実測)

写真1 実相寺庭園の全体のパノラマ

写真2 実相寺庭園の主観賞景観

写真3 実相寺庭園の枯滝石組

都の金閣寺・天竜寺などの滝石組にあるように、この枯滝石組を龍門瀑と考えられなくもない。また築山の庭園景観を引き締める立石が、左右両側に据えられており、龍潭寺庭園の仁王石を連想させる役石でもある。

そして南西側の前面は枯池となり、築山に正対する位置に礼拝石であろう平石が据えられている。現在、枯池は砂利敷となっているが、これは平成6年（1994）の後補である。

庭園の南東側、本堂からは東向正面の庭園景観には、見事な巨石を中心とした石組（写真5）がある。この巨石を羽石とすると、この石組は鶴石組とも考えられる。

（2）庭園材料

実相寺庭園の景石材料は、摩訶耶寺・龍潭寺庭園に使用されている石材と類似している。これは共に現地付近にある三嶽山及びその周辺で産出するチャート系が中心と考えられ、山石系統を使用している。ただ龍

潭寺庭園と比較して、実相寺庭園の方が大きい景石を使用した石組となっており、そのため龍潭寺庭園の景趣よりもダイナミックな印象を受ける。

植栽材料は、マキの生垣を外周に廻し、高木類はクロマツ・アカマツ・アラカシ・シラカシを中心に、サザンカ・サルスベリ・ネジキ・ヒノキなどであり、低木類はサツキツツジ・ミツバツツジ・ドウダンツツジ・コクチナシを中心に、ナンテン・ヒサカキなどが景趣を整えている。これらの植栽材料や低木類の玉仕立ては後補であり、ほとんどの植栽に対して作庭当初の樹種を継承するかは疑問である。

（3）観賞位置

次に庭園の観賞位置であるが、庭園手前の礼拝石から枯池を越えて築山中央の枯滝組に正対する視線を庭園景観の主軸と考える。勿論、建築内部からの景観として、本堂や観音堂からの座観式と考えられるような

写真4 実相寺庭園の鯉魚石

景観構成ともなっているが、純粋な座観式庭園ではなく、本堂と観音堂との間に降り立った位置から観賞すると考えられる。

3. 摩訶耶寺・龍潭寺庭園との比較

次に浜名湖の近傍には、この実相寺をはじめとして、前述したような古庭園があるが、ここでは特に実相寺庭園と類似すると考えられる摩訶耶寺・龍潭寺庭園との比較を行う。

(1) 作庭年代

実相寺庭園の作庭時期や作者に関する明確な史料は、現在のところまだ発見されていない。しかし、これに関しては同町内に位置する龍潭寺庭園についても共通している。

龍潭寺庭園は寺伝によると小堀遠州作庭としている。しかし学説では、遠州自身が没したのは正保4年(1647)であり、本堂などが建立された延宝4年(1676)の29年前にあたるため遠州作ではないとの見解である。しかし龍潭寺庭園の作庭時期は、その庭園構成や意匠の手法から推測して延宝・天和年間(1673~1683)の作庭²⁾と考えられる。

実相寺庭園の作庭時期についても、実相寺の本堂が再建されたのが延宝6年(1678)であり、龍潭寺の本堂建立とは2年違いである。また後述するように枯山水式と池泉式の相違、建物に対して庭園の配置場所の相違はあるが、この二庭については地割・意匠構成などの類似点が多い。作庭時期と作者については、特に今後の研究を待つこととなるが、井伊家の菩提寺とし

写真5 実相寺庭園の鶴石組(左)と亀石組(右)

ての龍潭寺庭園に対して、金指近藤家の菩提寺としての実相寺庭園を造営したのかもしれない。

(2) 庭園の地割と意匠

まずは地割についての比較を行う。龍潭寺庭園の地割(図6)は、枯滝組の数こそ違うが正面に枯滝組、庭園両側に仁王石、向かって右に鶴石組、庭園手前中央に礼拝石がある点が類似しているように考えられる。

また摩訶耶寺庭園の築山、池中の鶴島、護摩堂前の亀石組(蓬萊石組)などの意匠からなる地割(図7)は、枯山水と池泉庭園という相違はあっても、相互に類似した地割をもっているのではないだろうか。

次に各庭園意匠や手法による比較である。まず実相寺庭園の築山³⁾に関しては、摩訶耶寺庭園(写真6)・龍潭寺庭園(写真7)にも見られる美しい三連山の築山の形態となっている。これは摩訶耶寺庭園の場合には池泉の掘削土を利用した盛土造成と考えられ、また龍潭寺庭園の場合は、北部の山地斜面を利用した築山となっている。実相寺庭園の場合には、立地場所が丘陵地の山頂付近であり、その造成に際しての土盛りとも考えられるが、池泉のない枯山水であり、背後に山地斜面もないにもかかわらず、地表から約3mにまで造成された高さをもつ寺院庭園は珍しいと考える。

また実相寺庭園の枯滝組と意匠の相違はあるが、摩訶耶寺庭園の築山斜面の三尊石組(写真8)や、龍潭寺庭園の枯滝組(写真9)による意匠には、よく似た景観的印象を受ける。

また実相寺庭園の鶴島石組に付随するかのような南

写真6：摩訶耶寺庭園の築山

写真7：龍潭寺庭園の築山

写真8：摩訶耶寺庭園の三尊石組

写真9：龍潭寺庭園の東側の枯滝石組

側の石組（観音堂の北側）（写真10）は、摩訶耶寺庭園の護摩堂前の亀石組（蓬莱石組）（写真11）に類似しているようにも見える。また、この部分は蓬莱石組のようにも見え、鶴島石組としては不自然な意匠も、南側が亀石組（蓬莱石組）と考えれば理解することもできる。しかし、このように意匠同士が接近している事例は他になく、更なる研究が必要である。

これらのことから実相寺庭園は、摩訶耶寺庭園と龍潭寺庭園の影響を受けているものと考えられないこともない。言いかえれば実相寺庭園は、摩訶耶寺庭園の地割構成を実相寺諸堂との関連から地割の修正を施し、龍潭寺庭園の意匠を加えて庭園を構成していったとも考えられる。このことを考慮すると、実相寺庭園の築山が、かなり意図的に高く造成されていることは、摩訶耶寺・龍潭寺庭園に似せて造成したのかも知れないことをうかがわせる。

このように実相寺庭園は近藤家の祖廟のある寺院と

して、金指近藤家の加護のもとに造営され、その庭園もまた周辺古庭園の影響下のもとに形づくられていったと推察することもできるであろう。

おわりに

今回の調査は、まだ予備調査の段階と考えられ、十分な調査資料による考察とはいえない。

しかし、実相寺庭園自体は、その庭園構成や石組などから、近年まれにみる寺院庭園と考えられ、このような庭園が現在まで未発見であったことは、誠に遺憾に思われる。この実相寺庭園の作庭年代や作者などに対する研究は、何分にも確証となる史料などが乏しく、論理が推測の域にとどまるものであり、東海地方の庭園研究における摩訶耶寺・龍潭寺庭園などと同様に今後の研究がまたれる。

最後にこの調査に関して、このような機会を与えていただいた実相寺住職の巨島泰雄氏、株式会社中根庭

写真10 実相寺庭園の観音堂前にある亀石組

写真11 摩訶耶寺庭園の護摩堂前にある亀石組

園研究所代表取締役役所長の中根史郎氏、実相寺庭園の管理および発見者である栽松軒の渡邊強氏に、御礼申し上げます次第である。

(註)

- 1) 剪定管理及び改修に関しては、引佐町の造園業渡邊強氏による施工であり、剪定前の資料は残念ながらない。
- 2) ここでいう延宝・天和年間の手法とは、①回遊式でなく観賞式であること②北部山地を築山としていること③池泉の形態が、細長い竜池形式であること④池泉手前の芝・苔地が非常に狭いこと⑤池泉庭園にもかかわらず、枯滝組の意匠があることなどである。
- 3) ただし平成6年(1994)の強剪定管理の時に、三連山周辺の土が流出していたため、搬入土による盛土を施して改修している。

(引用ならびに参考文献)

- 1) 若林淳之監修(1991)『引佐町史上巻』静岡、引佐町
- 2) 若林淳之監修(1993)『引佐町史下巻』静岡、引佐町
- 3) 静岡県教育委員会文化課編(1979)『静岡県の近世社寺建築』静岡、静岡県教育委員会文化課
- 4) 重森三玲・重森完途(1998)『復刻版日本庭園史大系』東京、社会思想社
- 5) 河原武敏(1983)『名園のみどころ』東京、(財)東京農業大学出版会
- 6) 若林淳之(1991)『静岡県明治銅版画風景集』静岡、羽衣出版

表 1 実相寺関連の略年譜

寛永 19 年 (1642)	新正院 4 世、東林和尚が没する。 5 世に月川和尚が続席する。
正保 元年 (1644)	石牛生まれる。
慶安 2 年 (1649)	石窓 (13 歳) が法印につく。
慶安 4 年 (1651)	石窓 (15 歳) が了堂和尚につく。
承応 3 年 (1654)	明僧、隠元が来日する。
明暦 元年 (1655)	石牛 (12 歳) は永源空子和尚に落髪受具。
萬治 3 年 (1660)	新正院を実相寺に改める。
寛文 元年 (1661)	石牛 (18 歳) が隠元につく。
寛文 2 年 (1662)	石窓 (26 歳) が臨川寺に入る。
寛文 4 年 (1664)	6 月、独湛が実相寺に入る。 石牛が独湛に参侍する。
寛文 5 年 (1665)	初山宝林寺が建立する。
寛文 10 年 (1670)	石窓 (34 歳) が実相寺に住持する。
寛文 12 年 (1672)	秋、石窓 (36 歳) は実相寺を退院する。
延宝 2 年 (1674)	実相寺が焼失する。 石窓 (38 歳) は初山宝林寺へ再来する。
延宝 4 年 (1676)	実相寺 5 世、月川和尚が没する。 6 世に石牛 (33 歳) が続席する。
延宝 6 年 (1678)	実相寺本堂の再建する。
貞享 2 年 (1685)	石牛 (42 歳) が本山方広寺の座元職となる。
元禄 15 年 (1702)	実相寺音堂の再建する。 石牛和尚 (59 歳) が本山方広寺の住持職となる。
宝永 元年 (1704)	石窓 (68 歳) が没す。
宝永 2 年 (1705)	石牛和尚 (62 歳) は退山する。 賢翁和尚が本山方広寺の座元職となる。
宝永 3 年 (1706)	独湛が没す。
享保 2 年 (1717)	実相寺鐘楼門が建立する。
享保 10 年 (1725)	10 月、石牛和尚と賢翁和尚が機縁する。
享保 16 年 (1731)	実相寺 6 世、石牛和尚が没す。
宝暦 4 年 (1754)	実相寺 7 世、賢翁和尚が没す。
宝暦 13 年 (1763)	庚申堂が建立する。
安永 元年 (1772)	実相寺 8 世、龍溪和尚が没す。
安永 6 年 (1777)	実相寺 9 世、大拙和尚が没す。
安永 8 年 (1779)	実相寺観音堂を修理する。
文化 14 年 (1817)	実相寺 10 世、悦山和尚が没す。
弘化 2 年 (1845)	実相寺庚申堂・鎮守堂が再建する。
嘉永 2 年 (1849)	実相寺 11 世、要宗和尚が没す。
元治 元年 (1864)	実相寺 12 世、惟心和尚が没す。
明治 6 年 (1873)	実相寺内に金指小学校が創立する。
明治 41 年 (1908)	実相寺山門が再建する。
明治 39 年 (1906)	実相寺 13 世、鉄牛和尚が没す。
昭和 11 年 (1936)	実相寺庫裡が改築する。
昭和 24 年 (1949)	私立金指幼稚園が創立する。
昭和 29 年 (1954)	引佐町立幼稚園が創立する。 実相寺金毘羅堂が再建する。
昭和 32 年 (1957)	実相寺鐘楼門を解体修理する。
昭和 61 年 (1986)	実相寺庫裡を修理する。